

高等学校国語教科書における『源氏物語』採録箇所の研究

——桐壺卷・若紫卷採録の適切さを中心として——

菅 智 子

はじめに

古典文学作品に一度も触れたことがないという人はいないはずだ。なぜなら中学校、高等学校の国語の教科書には必ず掲載されているからである。限られた教科書のページ数の中に古典文学作品を原文のまま全て掲載することは不可能である。教科書に採録されている作品は、数多くある古典文学作品の一部であり、そして採録された箇所はその作品の中のほんの一部分だ。教科書を編集する出版社は、作品の中のどの箇所を掲載するか、長続きの文をどこで区切るか、また生徒の発達段階に応じて、現代語訳を掲載する、概要を説明するなどの工夫をしているはずだ。

今回は適切な古典教材の条件を考えたいので、「最高傑作」や「最高峰」と評される『源氏物語』に焦点をあて、高等学校国語教科書において『源氏物語』の採録箇所は適切かどうかを考えていきたい。

一 適切な古典教材の条件

教科書の適切さには、様々な観点のものがあろう。例えば、山本眞一郎氏は、教科書の編集には「教育的配慮」というタブーが存在し、文学的な価値よりも「教育的配慮」が優先されることがあると指摘している。^(註)あるいは、吉井美弥子氏は、教員の多忙さにより、多くの教育現場において定番教材が含まれない教科書が望まれないことをあげて

いる。^(注) いずれも興味深い観点といえるが、筆者としては検証しがたいため、ここでは『検定基準』をもとに適切な古典教材の条件を考えていきたい。

教科書が生徒の手に届くまでには、著作・編集、検定、採択、発行（製造・供給）及び使用と約四年間という長い時間がかかっている。その中で出版社は、文部科学省が検定のために必要な審査基準を定めている『高等学校教科用図書検定基準』を満たすように編集を行っている。『検定基準』をみると、教科書は、教育基本法や学校教育法、『指導要領』に示されるような目標の達成を目指してつくられるものということがわかる。そこで私は、『検定基準』をはじめとし、『指導要領』や『解説国語編』もふまえて、適切な古典教材の条件として次の四点をあげたい。

(A) 生徒の心身の発達段階に適切しており、心身の健康や安全及び健全な情操の育成について必要な配慮を欠いているところはないこと。

(B) 古典を進んで学習する意欲や態度を養うのに役立つこと。

(C) 人間、社会、自然などに対する様々な時代の人々のものの見方、感じ方、考え方について理解を深めるのに役立つこと。

(D) 様々な時代の人々の生き方や自分の生き方について考えたり、我が国の伝統と文化について理解を深めたりするのに役立つこと。

(A) については、古典教材の条件の大前提であると考え、ここからは、(B) ～ (D) の条件と照らし合わせながら『源氏物語』の採録箇所について見ていく。

二 高等学校国語教科書における『源氏物語』の採録箇所

文部科学省は平成二八年四月、『高等学校用教科書目録（平成二九年度使用）』を提示した。ここには翌年度に発行予定の高等学校用の文部科学省検定済教科書及び文部科学省著作教科書がすべて登載されており、翌年度に使用される教科書は、この目録から採択しなければならないことになっている。今回はここに掲載されている古典Bの教科書全一九冊のうち、文英堂を除いた九社一八冊を比較・検討の対象とする。なお、これら一八冊は全て『指導要領』に基づいて編集されたものであり、平成二五年に検定済みのものである。今回考えていく古典Bの教科書の出版社名、教科書番号、教科書名を次に列挙する。

- ① 東京書籍 古典B301 新編古典B
- ② 東京書籍 古典B302 精選古典B 古文編
- ③ 三省堂 古典B304 高等学校古典B 古文編
- ④ 三省堂 古典B306 精選古典B
- ⑤ 教育出版 古典B307 古典B 古文編
- ⑥ 教育出版 古典B309 新編 古典B 言葉の世界へ
- ⑦ 大修館書店 古典B310 古典B 古文編
- ⑧ 大修館書店 古典B312 精選古典B
- ⑨ 大修館書店 古典B313 新編古典B
- ⑩ 数研出版 古典B314 古典B 古文編
- ⑪ 明治書院 古典B316 精選古典B 古文編
- ⑫ 明治書院 古典B318 高等学校古典B
- ⑬ 筑摩書房 古典B320 古典B 古文編
- ⑭ 第一学習社 古典B328 高等学校 古典B
- ⑮ 第一学習社 古典B322 高等学校 古文編

- ⑬ 第一学習社 古典B324 高等学校 標準古典B
 ⑭ 桐原書店 古典B325 探求古典B 古文編
 ⑮ 桐原書店 古典B327 古典B
- 以下、表や本文においては番号で示すことにする。

・ 続いて、『源氏物語』の巻別採録状況をまとめたのが次の表である。
 ・ 巻別採録状況（※採録のない巻は省略した。）

⑮	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1 桐壺
										○					2 帚木
											○	○			4 夕顔
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5 若紫
										○					8 花宴
○	○				○	○		○	○	○		○	○		9 葵
		○	○	○	○	○	○	○			○	○	○		12 須磨
			○	○											14 澁標
		○			○				○	○	○	○	○		19 薄雲
					○	○									28 野分
		○	○			○						○			33 藤裏葉
○	○			○	○	○	○	○		○		○	○		34 若菜上
○	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		40 御法
												○			41 幻
			○	○			○	○							45 橋姫
○	○					○									51 浮舟
												○			54 夢浮橋

この巻別採録状況をみると九社一八冊全ての教科書において桐壺巻と若紫巻が採録されていることが分かった。さらにその中でも桐壺巻では光源氏誕生の場面が、若紫巻では光源氏が若紫を垣間見する場面が全教科書で採録されていることを確認した。有馬義貴氏は「高等学校「古典」における『源氏物語』採録箇所提案——桐壺」冒頭と「若紫」垣間見場面との連結——の中で二〇〇六年三月時点での教科書の巻別採録状況を示しているが、そこでも全出版社で桐壺巻と若紫巻の同じ場面が採録されている。^(注三)約一〇年間たった今でも採録されている箇所が同じだということはなにか理由があるはずである。この二つの場面の採録に関しては、吉井美弥子氏によっても考察されている。^(注四)そこでは当該場面が採録されることに関して、両者はいずれもその価値や適性を認めている。ここでは改めて教科書全てで採録されているこの二か所の場面について考えていきたい。

まずは、桐壺巻光源氏誕生場面の採録に関してである。以下は桐壺巻光源氏誕生の採録箇所をまとめたものである。

「いづれの御時にか〜かしづき給ふこと限りなし。」①②⑤⑥⑨⑪⑫

「いづれの御時にか〜御局は桐壺なり。」③④⑦⑧⑩⑭⑮⑯⑰⑱

「いづれの御時にか〜その恨みましてやらむ方なし。」⑬

全ての教科書で「いづれの御時にか」から採録されていることがわかったが、作品としても冒頭であることや、他の作品とは違う特徴があるとされている点でそれが条件(D)を満たすため適切であると考える。採録がどこで区切られるのが適切かについては、光源氏の誕生のみよりもそれによる帝や桐壺の更衣、周囲の様子を描いた部分まで採録しているほうが条件(C)をより満たすため適切であると考えた。したがって、「いづれの御時にか〜御局は桐壺なり。」や「いづれの御時にか〜その恨みましてやらむ方なし。」までの採録が適切であると考えた。

次に、若紫巻垣間見場面の採録に関してである。以下は若紫巻北山垣間見場面の採録箇所をまとめたものである。

「日もいと長きに〜と思ふ心深う付きぬ。」①②③④⑤⑥⑦⑧⑬

「日もいと長きに〜涙ぞ落つる。」⑨

「日もいと長きに〜帰り給ひぬ。」⑩⑪⑭⑮⑰⑱

「日もいと長きに〜つやつやとめでたう見ゆ。」^⑮

「清げなる大人二人ゝ露の消えむとすらむ。」^⑯

『源氏物語』の作品上重要人物である紫の上を光源氏が垣間見した場面という点で、「日もいと長きに」からの採録は、条件(D)を満たし適切であると考ええる。「日もいと長きに」は若紫巻の冒頭部分ではないが、この箇所から光源氏が若紫を見る小柴垣に移動する場面が描かれるため採録の初めとしてはよい区切られ方である。そして「日もいと長きに」から始まる採録がどこで区切られるのが適切かに関しては、「思ふ心深うつきぬ。」までが適切であると考えられる。これは、光源氏が若紫を垣間見しての心情が描かれているからである。特に、光源氏が「かの人の御かはりに」と表現している箇所は、藤壺の宮に思いをよせる光源氏がその形代として若紫を追うようになるという展開の出発点と考えられるため、条件(B)(D)を満たし適切であると考ええる。

光源氏誕生場面の採録や垣間見場面の採録に関しては、『源氏物語』の物語そのものの冒頭である点や、物語全体を通して主要な女性となる若紫の登場という点で適切である。

一方で、この採録のされ方に関して有馬義貴氏は、採録の適切性は認めたくえで次のように述べている。^(注五)

但し、少なからぬ教科書にみられる、この両場面を連続して扱っていくという構成には疑問が残る。この両場面は、学習者にとって有機的なつながりを見出し難いものであるように思われるからである。

有馬義貴氏は、学習者の大半が『源氏物語』に初めて触れるという段階で「桐壺」冒頭と「若紫」垣間見場面を連続して扱っていくことに関しては疑問を呈している。たしかに自分の高校時代の古典の授業を振り返ってみても、『源氏物語』がなんだかわからないが「すごい」作品だと学び、しかし実際に本文を読んでみても登場人物の多さや敬語などに難解だという印象が残っている。生徒にとってはこの両場面が単に連続して採録されているだけでは『源氏物語』は一体どんな物語かわかりにくいだろう。ここからはこの両場面を連続して採録するための工夫として適切なものはな

か考えていきたい。

三 「桐壺」冒頭と「若紫」垣間見場面の連結における工夫

桐壺巻では冒頭以外の場面を採録している教科書があることがわかった。特に「桐壺」冒頭と「若紫」垣間見場面の間に採録されているのは③④⑥⑦⑩⑬の六冊であり⑧は間に参考としての掲載がある。⑧を含めた七冊には桐壺巻冒頭以外のどの場面が採録されているかを整理すると次の表のようになる。

⑬	⑩	⑧	⑦	⑥	④	③	
飽かぬ別れ	藤壺の入内	藤壺の入内 (参考)	桐壺(二) 桐壺(三)	藤壺の宮の入内	藤壺の入内	藤壺の入内	見出し
「その年の夏、籠もりおはします。」	「藤壺と聞こゆ」と聞こゆ。」	「年月にそへて」とおぼえたまふ。」	「かの贈り物、たまひぬべかめり。」 「年月にそへて」とおぼえたまふ。」	「げに、御容貌」と聞こゆ。」	「源氏の君は」と聞こゆ。」	「源氏の君は」と聞こゆ。」	採録箇所
桐壺更衣が亡くなる場面	藤壺入内の場面	藤壺入内の場面	桐壺の死に帝の哀傷が深まる場面 藤壺入内の場面	藤壺入内の場面	藤壺入内の場面	藤壺入内の場面	場面

これを見ると⑦の桐壺(二)と⑬以外は採録箇所の違いはあるものの藤壺入内の場面を採録していることになる。

「桐壺」冒頭と「若紫」垣間見場面の連結において、つまり生徒が「桐壺」冒頭を授業で学んだあと、「若紫」垣間見場面の本文に入る前までに理解させておきたいのは藤壺の宮の存在である。

母である桐壺更衣に似ているという藤壺の宮を羨慕し、その藤壺の宮に似ている少女若紫を追うようになるという展開、藤壺の宮と若紫の存在は『源氏物語』全体を通して核となるものである。そして教科書の採録をみると「桐壺」冒頭では桐壺更衣が登場している。「若紫」垣間見場面では、若紫が登場している。その間に藤壺の宮が登場しなければこの一連の展開が理解できず、生徒は両場面をひとつの物語として連結させることは難しいだろう。

したがって私は、両場面間に藤壺の宮が登場する場面を採録すべきであると考え。③④⑥⑦の(三)⑧⑩の藤壺の入内の場面を採録することで、有馬義貴氏が述べていたような「桐壺」冒頭と「若紫」垣間見場面の連結の問題点は解消されると思う。

一方、藤壺の入内の場面の採録を行っていないその他の教科書であるが、藤壺の宮の存在を知らないまま「若紫」垣間見場面に進むことは本文の内容や光源氏の心情を把握し難い部分が出てくるはずであるから、なにか工夫が必要である。教科書を確認すると、藤壺入内場面の本文の採録有無に関わらず、全ての教科書で現代語での補足説明があることがわかった。『解説国語編』には次のようなことが記されている。

古典の教材としての古文と漢文を理解しやすくし、親しみやすくするためには、学習に際して読みにくい漢字や熟語に読み仮名を付けたり、難解な部分には、注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用いたりする配慮が必要となる。言うまでもなく、古典の学習においては原文は尊重される必要がある。したがって、例えば現代語訳などを取り上げるにしても、おのずと適切な範囲はあり、原文とのかかわりにおいて取り上げることが大切になる。具体的には、原文と対比できるよう現代語訳などを取り上げたり、原文の前後を現代語訳などで補ったり、原文と同一の文種や形態に属する他の文章や作品を現代語訳などで取り上げたりすることなどが考えられる。

ここでは古典の教材により親しみやすくするために、原文を尊重しつつも現代語訳等を活用する配慮が大切であるとされている。作品の全てを採録することはできない教科書においては、作品として価値ある部分の本文を採録し、またそれだけにとどまらず補足説明等の工夫によって作品全体への興味を示せるかが重要である。したがって、「若紫」垣間見場面の直前に補足説明がなされていることは適切である。

四 補足説明の適切さ

『解説国語編』からみても、「若紫」垣間見場面の直前に補足説明がなされることは適切であると思われる。ここでは、「若紫」垣間見場面の前後に書かれている補足説明の比較をし、何をどのように現代語で補足することが最も適切かどうか考えてみたい。

若紫巻垣間見場面では本文に入る前に全教科書で補足説明が現代語でなされている。桐壺巻と若紫巻の間には採録されていない巻があることや、若紫巻の中でも冒頭ではない箇所からの採録であることを考えると、垣間見場面の本文に入る前に補足説明をすることは生徒の理解のために必要な配慮であるだろう。そこで【表】では、全教科書でどのような補足説明がなされているかをまとめた。教科書番号が太字になっているものは、藤壺入内の場面の本文が若紫巻垣間見場面の前に採録されていることを表している。

【表】をみると共通点が見えてくる。基本的に次の四点が補足説明にふくまれている形が多い。光源氏三歳の時に母である桐壺の更衣が亡くなったこと、一二歳で元服し葬の上と結婚したこと、父桐壺帝の妻藤壺の宮に思いを寄せるようになること、一八歳、病気の治療のために北山を訪れたことの四点である。

③④⑥⑦⑧⑩は、若紫巻の垣間見場面の前に藤壺の入内の本文が採録されており、その本文の直前の補足説明として桐壺の更衣の死について触れられている。したがって全教科書で、桐壺の更衣の死は説明されていることになる。はや

くに母を亡くした光源氏が、藤壺の宮にその面影を探したり若紫を追ったりするようになるというこれからの展開を考えてみても、桐壺の更衣の死は補足説明がなされるべきである。

次に、光源氏が十二歳で元服し葵の上と結婚するという説明であるがこれは①②③④の四冊には含まれていない（コラムや葵の上が登場する箇所を採録するなどとはされている）。若紫巻垣間見場面は、女性の登場人物としては若紫と藤壺の宮が中心なため葵の上という存在がなくても話の内容はまとめることができる。しかし、光源氏が結婚しているのにも関わらずその葵の上との関係は良好ではなくその中で藤壺の宮や若紫を思うようになるというのが実際の作品の内容である。妻である葵の上という存在がいたということを若紫巻垣間見場面の前に生徒に理解させることは、生徒が今とは違う時代について想像力を広げながら考えることになるはずだ。したがって光源氏が一二歳で元服し、葵の上と結婚するという補足説明は必要であると考ええる。

次に、光源氏が父桐壺帝の妻藤壺の宮に思いを寄せるようになるという補足説明である。この説明がない③④は藤壺の入内場面の本文が採録されている。したがって全てで垣間見場面に入る前に、藤壺の宮という存在と彼女に光源氏が思いをよせていることを説明していることになる。垣間見場面から考えても、本文の中に藤壺を思う表現、「限りなく心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり」や「かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや」があるため、直前に藤壺の宮の存在を知らせるのは適切である。

最後に、光源氏が一八歳の時に病気の治療のために北山を訪れたことの補足説明である。今までの補足説明は光源氏の年齢に沿いながらなされておりそれは今回も同様である。とくにこの説明は若紫巻の途中から採録されている垣間見場面直前までの説明がなされており、本文に入る前に、いつどこでどのような場面かを説明することは適切である。

五 補足説明に関する提言

一方でこの説明をどこまで掲載するかに関しては問題が残る。【表】の中で気になるのは⑤⑥⑨⑬⑰⑱である。それはこの六冊に関しては、光源氏が若紫と出会うところまでが説明されているからである。⑤⑥⑬では、光源氏がみた少女は若紫（のちの紫の上）であったと若紫という言葉を出して説明がなされており、⑨では「運命的な出会い」、⑰⑱では「藤壺宮によく似た少女と出会う」と説明がなされている。これは、「日もいと長きに」から始まる本文のしかも中心となる内容を現代語で説明しているという点で、『解説国語編』に示されている現代語での補足説明の工夫としては配慮が足りないのではないかと思う。

『解説国語編』では、原文は尊重される必要があるとし、現代語訳などを取り上げるにしても原文とのかかわりにおいて取り上げることが大切であるとしている。そして具体的な工夫として原文の前後を現代語訳で補うことをあげている。列挙した六冊は本文に入る前に、光源氏は若紫という人物と出会うことや、運命的な出会いであることを現代語による説明によって知った上で本文に入ることになる。言わばこの本文の結論をあらかじめ知った上で読み始めるということである。これは、本文（原文）を尊重していいことになるのではないか。たしかに、本文はすべて古語のため古語のみで内容をすべて理解することは難しい。しかしこの本文での一番の核となる部分を現代語で補ってしまうのは適切ではない。本文を読み進める中で内容を把握していくというよりは、ここで登場するであろう人物が重要であることを知った上で本文を読み進めていくことになるため、原文を尊重しているとはいえない。若紫巻垣間見場面の直前の、さらに桐壺巻冒頭との連結という点での補足説明ではなく、本文の内容までここで補足説明がなされることは適切ではない。

ただ、採録された本文の箇所では、光源氏は、若紫の実際の身分や血縁関係を知っているわけではない。かわいらしい少女が尼君に似ていると感じ、さらに藤壺の宮に似ているため代わりに慰めとしてみたいなどと思いを巡らせている

が、若紫が亡くなっている按察大納言と尼君の娘である姫君と兵部卿宮の間に生まれた子であるといった素姓を知るの採録箇所のことである。だから六冊にあるような補足説明は、本文の採録の後ろにあるべきである。また、この補足説明を本文の直前にするならば採録箇所は若紫を見た場面ではなく、素姓を知った上で光源氏が若紫に対してどのような行動をとるかに注目した場面を採録するべきであると思う。現代語での補足説明はあくまでも採録されていない箇所の補足説明であり、それが本文の内容を網羅するものであつてはならない。

補足説明としてほかの教科書と違つたのは⑭⑮⑯の第一学習社のものである。これが他の教科書と違つたところは、採録されている桐壺巻とそれに続く若紫巻の間の三巻の説明がなされていることである。簡易であり、頭中将や夕顔、品定めなど突如として様々な用語が登場している。他の教科書の補足説明でも光源氏の年齢に沿つて説明はなされているが、このように光源氏以外の存在を示してはいない（あるのは葵の上のみである）。この補足説明によって生徒が作品や古典への興味を持つようになるといふ期待はある。採録されてはいないが、他にも巻があり登場人物がいることを、よくある便覧での説明に限らず教科書においても工夫がなされることは良いことだと考える。しかし若紫巻垣間見場面直前で様々な用語があると、本文自体にも難解なイメージを持たせかねない。だから、補足説明としては光源氏の年齢に沿つたはじめに述べた四点を含み、コラムや参考といった形でこの帚木巻、空蟬巻、夕顔巻の内容を挿入すると「桐壺」冒頭と「若紫」垣間見場面の連結という点では適切であると考ええる。

以上をまとめると、藤壺の宮入内の場面を採録したうえで、垣間見場面の本文に入る前の補足説明としては、本文の内容にはない部分、つまり垣間見直前の場面設定を示すことにとどまるべきである。原文を尊重するという意味で採録された箇所は古文で内容を把握させたい。さらにその補足説明においては、光源氏の年齢に沿つてそれまでの出来事ならねるとわかりやすい。そして「桐壺」冒頭と「若紫」垣間見場面の間には、帚木巻、空蟬巻、夕顔巻が存在する。もちろん便覧等、補助教材を使ってその内容を見ることはできるが教科書のなかにもそれらの内容がコラムや参考という形で掲載されると一層連結として適切であると考ええる。以上が「桐壺」冒頭と「若紫」垣間見場面の工夫について考えたことである。

おわりに

適切な古典教材の条件に照らし合わせながら『源氏物語』の採録箇所適切さについて考えてきた。『源氏物語』は日本の文学に変化や影響を与えた作品として「読むべき」作品である。その中でも「桐壺」冒頭と「若紫」垣間見場面は調査した全教科書で採録がなされていた。桐壺巻は物語の出発点であり、若紫巻は物語の中で主要な女性である若紫を光源氏が初めて見るという出発点であるということから二つの巻が採録される適切性は認められる。その中でも光源氏誕生の場面と若紫垣間見場面を取り上げること適切であった。一方その採録がどこで区切られるかについては、文が区切られることで原文とは意味合いがかわる可能性がある。また本文の前後の補足説明によっては本文（原文）を尊重していかないという危険性もある。

これらのことから「桐壺」冒頭においては「いづれの御時にか御局は桐壺なり。」や「いづれの御時にかその恨みましてやらむ方なし。」までの採録が適切である。そして「若紫」垣間見場面においては「日もいと長きに思ふ心深うつきぬ。」までが適切である。そして二つの場面の連結という点においては藤壺の宮入内の場面を採録するべきである。

また、その点をふまえたうえで、本稿ではとくに本文の補足説明に対する考察を行ってきた。垣間見場面の本文に入る前の補足説明としては、光源氏の年齢に沿ってそれまでの出来事をならべたうえで垣間見直前の場面設定を示すことにとどまるべきである。そして「桐壺」冒頭と「若紫」垣間見場面の間には、帚木巻、空蟬巻、夕顔巻が存在する。便覧等、補助教材を使ってその内容を見ることはできるが、教科書のなかにもそれらの内容がコラムや参考という形で掲載されると一層連結として適切である。

以上が高等学校国語教科書において『源氏物語』の採録箇所は適切かについての結論である。

【表】

	補足説明
① ②	<p>三歳で母桐壺の更衣と死別した男皇子は、臣籍に降下して光源氏と呼ばれるようになった。光源氏は、その後入内してきた藤壺の宮が亡き母に似ていると聞いて、いつしか思慕するようになった。だが、父桐壺の帝の後である藤壺の宮への愛は、思うにまかせぬものであった。</p> <p>十八歳の春のこと、光源氏は、北山の聖にいる山寺に癡病（一定の周期でおこる熱病）の祈禱に出かけていった。祈禱の合間に、その寺の近くで小柴垣（雑木で編んだ垣根）に囲まれた風情のある住まいを見かけ、興味を覚える。</p>
③ ④	<p>十八歳の春、光源氏は熱病にかかり、治療のため、北山に住む聖（修行僧）のもとを訪ねて加持祈禱を受けた。その合間に辺りを散策するうち、小柴垣を巡らし、庭の木立も風情のある僧坊に童女や女房たちがいるのを目をとめる。</p>
⑤	<p>光源氏三歳の年に、病気がちだった母桐壺の更衣が亡くなる。悲しみの癒えない桐壺帝は、亡き更衣に似ている藤壺の宮を入内させた。光源氏も、ひそかに藤壺の宮を慕うようになる。光源氏は十二歳で元服して左大臣の娘（葵の上、当時十六歳）と結婚し、官位も進んで中将となったが、藤壺の宮への思慕はますます募っていった。十八歳の年、病気の治療に北山の聖のもとを訪れた光源氏は、惟光たちと、小柴垣をめぐるした風情のある僧坊に目をとめる。そして、そこで、藤壺の宮によく似た少女を見つけた。後の紫の上である。</p>
⑥	<p>光源氏は十二歳で元服して左大臣の娘（葵の上、当時十六歳）と結婚し、官位も進んで中将となったが、藤壺の宮への思慕はますます募っていった。十八歳の年、病気の治療に北山の聖のもとを訪れた光源氏は、惟光たちと、小柴垣をめぐるした風情のある僧坊に目をとめる。そして、そこで、藤壺の宮によく似た少女を見つけた。後の紫の上である。</p>
⑦ ⑧	<p>光源氏は一二歳で元服し葵の上と結婚するが、その生活に満足せず、亡き母の面影を求めて、天帝のもとに入内した藤壺を思慕し続ける。</p> <p>光源氏一八歳の春、彼は熱病にかかって苦しみ、京の北方の山に住む僧のもとにおもむいて、加持祈禱を受けた。その日の夕刻のことである。</p>
⑨	<p>桐壺の更衣は、周囲の人々の嫉妬や迫害を受けて病気がちになり、光源氏三歳の夏にこの世を去った。その後、父桐壺帝のもとで成長した光源氏は、一二歳で元服（成人の儀式）し左大臣の娘葵の上と結婚する。しかし、源氏はその生活に満足せず、亡き母の面影を求めて、父の妻藤壺を思慕し続ける。</p> <p>一八歳の春、光源氏は熱病にかかって苦しみ、治療に優れた僧がいるという北山を訪ねる。その北山で、源氏は女性ばかりが住む小柴垣の家を目をとめ、夕方、そこへ出かけることにした。そこで源氏は運命的な出会いをする。</p>

⑩	<p>光源氏は一二歳で元服し、左大臣の娘葵の上と結婚したが、藤壺の宮を慕う心が強くなっていく。一八歳の春、彼は病を得て、加持のため訪れた北山で気になる僧坊を見つけた。</p>
⑪	<p>「玉の男皇子」は、三歳で母、桐壺の更衣と死別した後、「源」の姓を与えられて臣下の身分とされ、「光源氏」と呼ばれた。父帝は、後に更衣に似た女性を后に加えた。藤壺の宮である。光源氏は一二歳で元服した際、左大臣の娘（葵の上）と結婚したが、ひそかに藤壺の宮を思慕し続けていた。</p>
⑫	<p>一八歳の春、光源氏は、病気の治療のため都郊外の北山に住む聖のもとを訪れ、小柴垣（雑木で編んだやや低い垣根）で囲まれた住まいを見かけ、興味を覚える。</p>
⑬	<p>皇子は、三歳で母・桐壺更衣を亡くしたのち、「源」の姓を与えられ、光源氏と呼ばれた。やがて源氏は、父帝が迎えた藤壺の宮をひそかに思慕するようになる。 源氏は、十二歳で元服し、左大臣の娘、葵の上と結婚したが、藤壺への思いはやみがたかった。十八歳の春、病気の治療のため赴いた北山で、源氏は若紫の君（のちの紫の上）を見出たすことになる。</p>
⑭	<p>光る君は、三歳の夏に母更衣と死別する。帝は高麗人の予言なども参考にして、光る君を臣籍に下し、源氏とした。元服した光源氏は葵の上（左大臣の娘）と結婚したが、亡き母に生きうつしだと言われる藤壺の宮をひそかに思慕し続ける。桐壺に続く三卷（帯木・夕顔）は、源氏十七歳の物語である。五月雨の夜、頭中将（葵の上の兄弟）たちの語る女性論（品定め）を聞いた後、源氏は、さまざまな恋愛を体験するようになる。ふと知り合った女性（夕顔）の突然の死に遭遇して病床に臥したこともあった。次の若紫の巻は源氏十八歳の春である。</p>
⑮	<p>光源氏の母である桐壺更衣は、源氏が三歳のときに亡くなる。帝は高麗人の予言などをもとに源氏を臣籍に下し、源の姓を与えた。元服した源氏は、左大臣の娘の葵上和結婚するが、その心は、父の妃である藤壺宮への思慕の情で占められていた。母に似ているという藤壺宮への思いは、やがて許されない恋情へと変わっていく。一八歳を迎えた春、源氏は病氣治療のために訪れた北山で、藤壺宮によく似た少女と出会うことになる。</p>
⑯	

凡例

以下のよく利用するものは、↓以下の略号をもって注記を省略する。

文部科学省『高等学校教科用図書検定基準』（平成二十二年九月九日文部科学省告示第一六六号、平成二十六年一月一七日改正）

http://www.next.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/kentai/1343961.htm (二〇一七年一月三日一五時閲覧) ↓ 『検定基準』
文部科学省 『高等学校学習指導要領』(平成二十二年度文部科学省告示第三四号) ↓ 『指導要領』
文部科学省 『高等学校学習指導要領解説国語編』(平成二十二年六月) ↓ 『解説国語編』

注

- 一 山本眞一郎「教科書と文学」『日本文学』六四卷一号(二〇一五年一月)
山本眞一郎氏は、特に小説教材に定番教材が多いとしてその選定や教育的配慮に関して論を進めている。これらは古典教材に関しても同様に言えることだと考える。
- 二 吉井美弥子「国語教育を超えて」『早稲田大学国語教育研究』三四卷(二〇一四年三月)
- 三 有馬義貴「高等学校「古典」における『源氏物語』採録箇所 の提案―「桐壺」冒頭と「若紫」垣間見場面との連結―」『源氏物語 続編の人間関係―付物語文学教材試論』(新典社・二〇一四年)
- 四 吉井美弥子「国語教科書における『源氏物語』―『源氏物語』は「最高傑作」か―『源氏物語研究の現在』(おうふう・二〇〇六年)
- 五 注三に同じ。